東京新聞こちら特報部
「次」が来たら 被災3原発のいま

2021 3.11～3.13

東京新聞 (第3種郵便物認可)

こちら特報部

「次」が来たら (上)

被災3原発のいま

十年前、未曽有の地震と津波によってもたらされた東京電力福島第一原発事故。それは原発というシステムが、自然の脅威には決して勝てないという重い教訓を残した。だが、政府や電力会社はいま、事故前に地震や津波の専門家から鳴らされた警鐘を黙殺したのと同様に、あの教訓を無視してあくなき原発推進に走る。もし「次」が来たら、何が起きるのか。すでに地震や津波の被災経験がある三つの原発について考える。

福島第一

あの時の危機感 薄れてないか

先月震度6弱「原発は無事か」

先月十三日の夜。福島市の復興公営住宅でくつろいでいた元原発関連技師の今野寿美雄さん(72)は、強烈な揺れに襲われた。震度6弱。とっさに十年前の地震が頭をよぎる。「原発は大丈夫か」

揺れが収まるとすぐに、ネットで東京電力が公開している福島第一原発敷地内のライブ映像を確認した。津波が来ないと分かった後も安心できなかった。実際、東京電力が1、3号機で格納容器の水位が下がっていると公表したのは地震後六日もたってから。「十年前にできた亀裂が十三日の地震で大きくなっているんじゃないのか」

事故前までは原発や火力発電の電気制御の仕事をしており、福島第一原発に何度も通った。事故当日は東北電力女川原発に出張中。テレビで福島第一の建屋から白い煙が上がるのを見て「この世の終わり」と感じた。妻子と福島県内の避難所や借り上げ住宅を転々とした後、二〇一五年から復興公営住宅で暮らす。「この十年は、避難生活を安定させるので精いっぱいだった」

福島第一原発から北西十キロにある浪江町川添地区の自宅は事故後、居住制限区域に。一七年三月末に避難指示は解除されたものの、自宅周辺の土壌の放射線量は高く、昨年九月に取り壊した。避難に伴い東京電力から受けた補償金七百二十万円は、ローン返済に消えた。自宅のそばにある実家や墓は今も帰還困難区域で、立ち入りには申請が必要になる。今春、高校生になる息子の颯人さん(18)は事故から一度も墓参りをできずにいる。

昨年九月、東京電力は1～4号機の海側にある防潮堤の新設計画を出した。建設中の海抜十一メートルの防潮堤を増強し全長六百メートル、海抜十三～十五メートルにするという。「いくら防潮堤を築いても、それを乗り越える津波が来る可能性はゼロではないだろう。現実に想定外の津波が来たのだから」と今野さん。

福島県郡山市議で脱原発活動をしている蛇石郁子さん(72)も「次の災害」を危ぶむ。「福島第一原発から放射性物質が放出されると、風向き次第で避難しなければならない地域は異なる。各自治体はそうした事態に対応し、安全に住民を避難させなければならない。受け入れ先の自治体も含め、大混乱になる」

先月十三日の地震後、3号機の原子炉建屋内にある地震計二台がいずれも故障しており、東電が修理せずに半年以上放置していたことが発覚した。蛇石さんは「今の福島第一は、十年前と同じかそれ以上に危険だと感じる」と、東電の対応に不信感を募らせる。

汚染土などが詰まったフレコンバッグの山のそばで「事故の教訓が風化しつつある」と話す今野寿美雄さん

東京電力福島第一・第二原発　第一原発は1971年に1号機が完成。74～79年に2～6号機が相次いで造られた。2011年3月11日の東日本大震災で運転中だった1～3号機は自動停止したが大津波により全電源喪失し冷却不能に。翌12日に1号機の建屋が水素爆発。3号機(14日)、定期点検中の4号機(15日)もそれぞれ建屋が水素爆発した。東電は同5月20日に1～4号機の廃炉を、13年12月に5、6号機の廃炉を決定。第二原発の全4基は19年7月に廃炉が決まった。

ニュースの追跡

東京新聞 (第3種郵便物認可)

こちら特報部

「事故現場」備え進まず

敷地内 壊れた格納容器、大量の処理水

「二度と戻れなくなってしまう」

福島第一、第二原発は廃炉が決定しているものの、そもそもメルトダウン(炉心溶融)した第一原発1～3号機の格納容器の詳しい状態は、高濃度の放射線量に阻まれていまだに誰も確認できていない。

特に2、3号機では、原子力規制委員会の調査で格納容器の上ぶたが高濃度の放射能で汚染されていることが判明。放射性セシウム濃度の推計値で2号機は二京～四京ベクレル(京は兆の一万倍)、3号機は三京ベクレルと極めて高い。調査チームリーダーで原子力規制庁前長官の安井正也特別国際交渉官は一月、上ぶたの取り外しは難しく保管場所すら困ることを認めた。

第一原発敷地には汚染処理水タンクが千基超あり、原発近くの中間貯蔵施設で大量の放射性廃棄物を保管している。こうした区域を津波が襲えば、広く放射能汚染が起きる恐れもある。

事故は現在進行形であり、その「事故現場」を地震・津波が襲った場合の対応や避難計画については、十年前からほとんど何も進んでいない。だが、先月十三日の震度6弱地震が示すように、「次」が来る可能性は低くはない。

「気がかりなのは、日本海溝の沖合側を震源にした『アウターライズ地震』が起きる可能性があるという話だ」と語るのは、大熊町前副町長石田仁さん(76)。

アウターライズ地震とは、震災の影響で太平洋プレートの日本海溝より沖合側にある断層が動きやすくなって起きる地震のこと。過去には明治三陸地震(一八九六年)の三十七年後に大津波をもたらした昭和三陸地震(一九三三年)がこのタイプという。

東北大大学院の日野亮太教授(地震学)は「太平洋プレートが、マグニチュード8に及ぶようなアウターライズ地震を起こす可能性は今後もある」と指摘。震源の位置によって津波が押し寄せる場所や高さは異なり予測は難しいとしつつ「東日本大震災と同じくらいの高さの津波がまた来る恐れもあり、引き続き警戒すべきだ」と警鐘を鳴らす。

石田さんの住む大熊町は、原発事故で、全町民一万二千人余が避難。同県会津若松市やいわき市に加え県外各地にも散り散りになった。石田さんは「避難生活が長引いたお年寄りから、涙と鼻水を流しながら『いつ帰れんの?』と聞かれたのに、すぐには答えられなかった。避難先で亡くなった方もたくさんいる」と振り返る。

一昨年四月に一部地域の避難指示が解除され、住民の帰還が始まっているが、自宅周辺は、十三軒のうち四軒しか住民が戻っていない。「帰還が始まるまで時間がかかりすぎた。大熊は復興どころか、復旧し始めたばかりというのが正直な思いだ」。それだけに「次」が来るのを心配する。「十年前のような事態になれば住民たちは今度こそ二度と戻れなくなってしまう」

前出の今野さんは、怒りをにじませつつ言う。「今の福島第一原発は複数の格納容器が壊れている分、災害への防御は弱くなっている。ここ数年で増えた猛烈な台風や豪雨が直撃する恐れもある。それなのに十年たっても、政府や東電が描く廃炉計画や災害への備えはまだ『絵に描いた餅』でしかない」

今の自宅がある福島市では、除染で出た放射性廃棄物を詰めた黒い土のフレコンバッグ(フレコンバッグ)を中間貯蔵施設に運ぶ作業が進む。フレコンバッグの山がどんどん減るのを見てきた今野さんは、こう語った。

「原発は一度コントロールできなくなれば、人の手に負えない物だと、十年前に嫌というほど味わった。今は、あの時の危機感が人々の間で薄れていないか。現場で働く作業員たちは、被ばくしつつ先の見えない作業に必死だ。あの日を繰り返さないために、政府や東電は今からでも住民たちを本気で守る姿勢を見せてほしい」

(中山岳)

オンライン取材で、次の地震や津波への危機感を語る石田仁さん

「10年たっても、福島県外では再稼働の動きがあるのは残念」と語る蛇石郁子さん＝福島県郡山市で

東日本大震災から10年となる東京電力福島第一原発＝福島県大熊町で(本社ヘリ「おおづる」から)

話題の発掘

デスクメモ

「人間社会内の線引きと違い、自然は厳然としている。猶予してもらったり、交渉できる相手じゃない」。かつて元原子力規制委員会委員長代理の島崎邦彦氏はこう語った。あの津波の前にもっと警鐘を鳴らしていれば、という悔恨を込めて。「次」は必ず来る。猶予も交渉もなく。(歩)

2021-3-11